

プログラム・ノート

山田治生

ベートーヴェン：ピアノ三重奏曲第1番 変ホ長調 作品1-1

1792年にボンからウィーンへ移り住んだルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の作曲家としての公式のデビューとなる「作品1」は、1795年に出版された3つのピアノ三重奏曲であった。ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)やヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)の時代のピアノ三重奏曲はピアノが中心であったが、ベートーヴェンは、3つの楽器が対等に活躍する三重奏曲の創作を目指した。また新進気鋭のピアニストであった彼は、自らの高度な演奏技巧を活かすように曲を書き、家庭音楽的なピアノ三重奏曲を演奏会用の作品に発展させたのであった。

ピアノ三重奏曲第1番では、4楽章構成がとられ、第3楽章はメヌエットではなくスケルツォ。軽快で晴れやか。ベートーヴェンらしい佇まいも感じられる。

サン＝サーンス：ピアノ三重奏曲第1番 へ長調 作品18

2021年は、カミーユ・サン＝サーンス(1835～1921)の没後100周年にあたる。パリ生まれの彼は、早くから神童として注目され、若い頃は革新的な作曲家とみられていた。しかし、死の年までの長きにわたる創作活動を通して、後年は、古典主義者、保守主義者とみなされるようになっていった。

1863年から64年にかけて作曲されたピアノ三重奏曲第1番は、第1主題の特徴的なリズムに貫かれた優美で軽やかな**第1楽章**、複付点のリズムを含む悲哀を帯びた旋律が歌われる**第2楽章**、弦楽器のピッツィカートとピアノのスタッカートとの組み合わせが面白い、軽快なスケルツォの**第3楽章**、ヴァイオリンとチェロとの優しい対話のあと、対位法的な音楽が展開される**第4楽章**からなる。

ドヴォルジャーク：ピアノ三重奏曲第3番 へ短調 作品65

アントニン・ドヴォルジャーク(1841～1904)は、1870年代半ば、ヨハネス・ブラームス(1833～97)によって才能を認められ、国際的に紹介された。二人の親交はブラームスが亡くなるまで続く。ピアノ三重奏曲第3番は1883年に作曲された。ブラームスが1882年にピアノ三重奏曲第2番を書き上げているが、両作品は2つの弦楽器のユニゾンで開始するところが共通している。

第1楽章は、ヴァイオリンとチェロのユニゾンで始まる第1主題とチェロによって朗々と提示される第2主題を中心に展開される。スケルツォ的な性格の短調の**第2楽章**。**第3楽章**は、ドヴォルジャークらしい旋律の美しさが味わえるポーコ・アダージョ。**第4楽章**は、ボヘミアの民族舞曲のリズムが取り入れられた、快活な音楽。